

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第80号

毎月発行

発行 2019年(平成31年)1月16日 水曜日

2019年(平成31年)1月16日 水曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営
コンサルタント、趣味は縄
文研究、今年1月に『東北先
史時代学』を提唱、東北から
日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



新年号企画【東北人とは何か】を問う 奈良時代の陸奥国北部、黒川以北の「移植」 連載企画 【東北先史時代学】 ⑬

新年号にあたり、
あらためて「東北人
とは何か」を問う

以前、「東北人とはだれか」というテーマを取り上げたことがある。その際は総論的かつ抽象的な話に終始した。

最近、たまたま古代の陸奥国の歴史を調べる機会があり、興味深い具体的な史実に巡り合ったので、新年にあたり、あらためてこのテーマを取り上げることにした。

当新聞は「東北復興」を掲げる以上、その原点ともいえるべき「東北とは何か」「東北人とはだれか」という基本的なテーマは外せない。

新聞が継続する限り、そこにこだわり続けていきたいと考える。

今から千三百年前の
陸奥国北部の「人植」と「移植」を考える

前記の具体的な史実とは、今から千三百年前の陸奥国北部の「人植」と「移植」という史実である。

その時代は奈良時代であり、朝廷は全国的な律令体制浸透を目指し、また全国統一を目指して、従わない地域を武力で侵攻しようとしていた時代であった。

こうした侵攻のなかでも、当時の陸奥国北部、現在の宮城県を中心とした地域では、すさまじい戦いもあり、策謀もあり、結果的に、それまで陸奥国で暮らしていた人々で朝廷に反抗したが敗れた人々は全国に強制的に移住させられた。これを「移植」という。

他方、陸奥国北部を事実的に支配し、耕作地を拡大し、税収増を目論む朝廷は、当時の坂東地域、現在の関東地方全域から、農民を強制的に陸奥国北部に移住させた。これを「移植」という。朝廷は、この「移植」により、陸奥国北部以北に暮らしていたエミシの力を弱体化させようとした。

【移植の史実】・・・歴史書の注目すべき記事 霊亀元年(715)5月、相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野六国の富民千戸を移して陸奥に配す。

律令制度導入

こうした朝廷の強引な試みは、ある部分では成功したかに見えたが、他方で、エミシの大きな恨みを買うことにもなった。

そして、最終的には、日本でも最も長い「三十八年戦争」へとつながっていくという歴史がある。

大宝1年(701年)、「大宝律令」が制定され、地方は国(こく)、郡(ぐん)、里(り)という単位に分けられ、国司、郡司、里長が置かれた。

国司は都から派遣され、郡司はその地方の豪族が任命され、里長には有力な農民が任命された。こうした命令系統によって税の取り立てが組織的に行われた。

また都を中心とする交通網も敷かれた。加えて、駅馬、伝馬という中央・地方間の情報伝達システムも構築された。それらは軍事用に用いられて強力な武器となっていた。

徐々に整備されていった大和中央集権国家は、いよいよ東北の地に「城柵」を建設して、国家の版図を拡大していった。

最初は647年に新潟の淳足柵(ぬたりのさく)を、続いて648年に同じく新潟に磐舟柵(いわふねのさく)を、七世紀後半には福島郡山遺跡を、709年

には山形の出羽柵(ではのさく)を、そして、東北最大の基地である「多賀城」を709年に設置した。

こうして、もともと「ひとつのくに」であったものが、西日本を中心とした中央集権国家と特に東北以北の地域とは完全に別のクニに分裂してしまっただけで、今から約千三百年前のことであつたのだ。

またこの間、西日本を中心とした中央集権、武力を伴った新国家への急激な変化を東北の地に住む人々・エミシたちは詳しく知りえなかつたし、たとえ一部を知つたとしても、あまりにも変わらぬその全容を理解することはできなかった。あるいは、その変貌ぶりを最初は過小評価していたのかもしれない。

三年余りを費やして724年に設置された多賀城の規模は壮大である。収容人員は常時一万人を超えたとはいわれている。

現代の一億二千万人の人口規模から考えるとあまり多いとは思えないかもしれないが、千三百年前の総体人口は少ないし、まして陸奥国の人口を考えたとき、一万人という規模がどれほどのものだったかを想像してみればよい。

加えて、あまりにも巨大すぎた多賀城の全容は現在でもその大きさが判明して

いないのである。敷地周辺にある、あまり有名ではないが広大な石畳の一部や山王遺跡、はたまた延喜式内神社、さらには敷地外に存在する荒脛中神社も残っている。

また、陸奥国府、鎮守府、政庁、寺院、食料貯蔵庫、囲み櫓などがあつた。

また、最近発掘された山王遺跡は高級官僚の住居群といわれているが、その規模も万人単位での規模ということであるが、まだ全容は解明されていない。

往時の全体規模を想像させるような模型すらないが、

初めに、歴史書の記述を見てみよう。そこには「霊亀元年(715)5月、相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野六国の富民千戸を移して陸奥に配す」とある。

想像力で往時の規模を再現するしかない。たしかに、そこには巨大な朝廷の出先機関があつたのだ。

ここを拠点にして、陸奥国北部を侵攻しようということであり、同時に、この巨大施設を背景にした移植を強引に推進しようとしたのである。

黒川以北十郡、十一郡

多賀城という東北侵攻の大拠点

当時の黒川以北郡郷名	対応する当時の国郡郷名	現在の県・市町村
小田郡小田郷	上総国小田郷(埴生郡)	千葉県印旛郡栄町
小田郡賀美郷	常陸国賀美郷(多珂郡)	茨城県高萩市、北茨城市、日立市
牡鹿郡賀美郷	武蔵国賀美郡	埼玉県児玉郡
賀美郡	陸奥国磐瀨郡	福島県磐瀨郡
賀美郡磐瀨郷	相模国	神奈川県
色麻郡相模郷	下野国阿蘇郡	栃木県佐野市
色麻郡安蘇郷	常陸国信太郡	茨城県稲敷郡、土浦市・新治郡
志太郡志太郷	下総国玉造郷(埴生郡・匠嵯郡)	千葉県
玉造郡信太郷	上野国新田郡	群馬県太田市
玉造郡玉造郷	陸奥国白河郡	福島県白河市
黒川郡		
新田郷		
黒川郡白川郷		

【移植の史実】・・・今から1300年前の陸奥国北部・黒川以北の郡名・郷名と坂東の郡名・郷名との関係

霊亀2年(716)千戸移民によって黒川以北十郡が成立したとの見方ができる。黒川以北十郡とは、黒川郡、志太郡、賀美郡、色麻郡、玉造郡、長岡郡、富田郡、新田郡、小田郡、牡鹿郡の十郡である。

また、遅くとも天平11年(729)の正月までには、「黒川郡以北の十一郡」(十郡プラス遠田郡)が成立していたようだ。



古代陸奥国北部の城柵と官衙跡 (東北歴史博物館 前今泉館長講座資料)

千戸移民とはどれくらい
の比重であったか
霊亀元年(715年)の千戸移民というのは、一体どのくらいの割合、規模の植民であろうか。

郷であるから千戸は二十郷にあたる。後の九世紀に、この「黒川以北十郡」の地域は三十二郷であるから、千戸の植民はその約63%に当たるといえる。この見方もできる。該当する地域の過半数が移民で占められるという状況を想像すると、もともと住民であるエミシたちがどういう気持ちになったかは容易に想像できる。

それでも植民者の数は足りなかったというのが朝廷の見立てのようだった。したがって、さらに移植は推進されていっただろう。宮城北部の地名の由来と移植者と遠田郡 さらに興味深い事実がある。陸奥国北部の黒川以北十郡、現在の宮城県北部の地名は、当然、昔からあって土地にちなむ何らかの理由でつけられた地名だと思われる。ところが、実状はまったく違う。まったく別の場所にある地名が移植者とともに移動して来たのであり、そのことはあまり知られていない。それを具体的に示してみよう。

多賀城と城柵に守られた移植民 大量の移民の入植により、耕作地を奪われ、どんどん追い詰められていくエミシたちもついに立ち上がる。養老4年(720年)のエミシの反乱である。しかし、その反乱で打撃を受けはしたが、二年後の養老六年の改革によって、大崎平野の東西に3〜13km間隔で城柵型郡が設置され、十郡を守る防衛線

が構築されたのである。(二面の地図参照) 黒川十郡の南方にどっしりと構える多賀城、そして陸奥国北部に再構築された城柵群はさらに強固となり、それに守られた移植民は、エミシたちを尻目に、さらに活発に入植活動を開始したのである。

唯一の例外だった遠田郡、反抗エミシの郡 こうした経緯で出来た黒川以北十郡だったが、後に黒川以北十一郡となるときに作られた「遠田郡」だけは例外だった。当時の遠田郡(今の遠田郡ではない)だけは、先ほどの流れとは別で、他の郡はすべて「公民」であり他の地域からの入植者で税金も納めていた人たちだったが、遠田郡だけは別だった。「海道蝦夷の反乱」という大きな蝦夷の反乱が集結した神亀初年(724年)

に「十郡」の或る郡、おそらく小田郡か新田郡を分割して反抗蝦夷を強制移住させ村を建てたのである。それが水田農耕地帯の田夷村という村だった。これが天平9年(737年)までに「遠田郡」の名を得た。



その改姓人数は、田夷遠田郡人合計の一人もの数にのぼった。そして後に、この元反抗エミシたちが、陸奥国北部のエミシ鎮圧、日本初の手泉南部への朝廷の侵攻などを支えていくことになるのである。それはまた、朝廷による反抗エミシ懐柔作戦が成功していくということでもあった。

黒と白と川と河 ここまで原稿をしたためていたら、突然「黒川」と「白河」が重なって見えてきた。東北の歴史で重要な地名である「白河」、そしてそれに千年以上先行する「黒川」、忘れてはならない地名である。(続く)

陸奥国北部の郡の分布状況



新宿 樽一

クジラを食す
日本酒は浦霞
(金ラベル・生酒)
ホヤも旨い
三陸海鮮の店
新宿樽一



クジラの刺身



飲みやすい浦霞金ラベル



スパークリング生酒



ホヤの酢の物



日本酒のあてに最高!

第53回
水産業再興のための
料理レシピ紹介
**《大根で作る
タラコの子和え》**
昔からの冬だから味
わえるタラの和えも
のです
(松本談)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

『**材料**』 大根 200 g、生タラコ 150 g、出し汁 100CC、酒大1、みりん大1、砂糖大1、醤油大、油大1

『**作り方**』 ① 大根は千切りにします。
② 生タラコは、皮から出します。
③ 大根を油で炒め、出し汁、調味料を入れ、10分程煮ます。
④ そこへ、生タラコを入れ混ぜます。火が通ったら出来上がりです。

写真でお伝えする 東北の風景(新年)

写真撮影 尾崎匠



謹賀新年

昨年中は
大変お世話になりました。
本年もどうぞよろしく
お願いいたします。



「せんカフェ」

食べ物と「想い」を持ち寄るカフェ

昨年四月から「せんカフェ」を始めた。毎月第三火曜日の午後七時から、仙台市の中心部、一番町にある公共施設、エル・パーク仙台が会場である。参加する人には、食べ物一品と自分の「想い」を持ち寄ってもらう。こちらからは飲み物を提供し、ソフトドリンクのみは五百円、アルコール類も飲む人は千五百円を会費として支払ってもらう。医療や介護の資格のあるなし、病気や障害のあるなし、老若男女問わず、いろんな人が「ごちゃ混ぜ」で自分たちの地域の医療や福祉やまちづくりなどについて自由に語り集いの場である。今回はこの「せんカフェ」について紹介したい。

「地域連携」の変遷

私が仕事で担当している雑誌は、医療側から見た

地域連携がテーマである。

一昔前まで、医療は多くの場合、一病院完結型で提供されていた。つまり、入院して治療してリハビリして完治して退院、という流れだった。しかし、この病院もそのような体制だと効率が悪く、それで、地域にあるそれぞれの病院が自分の強みを活かして急性期や回復期、慢性期などの医療をそれぞれ担い、連携して医療を提供する、地域完結型の医療が進められるようになった。日常の医療はまず地域のかかりつけ医となつている診療所で行い、生命の危機に関わる疾病を発症した場合はそこから紹介されて急性期の病院に入院、生命の危機を脱した後には回復期の病院に移ってリハビリなどを進め、さらに療養が必要な患者は慢性期の病院に移る、といった流れに変わった。

執筆者紹介

大友浩平

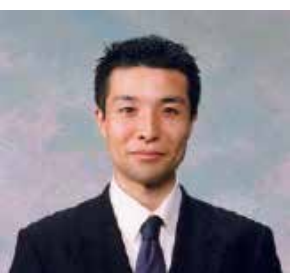
(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

<http://blog.livedoor.jp/anagna5/>

Facebook
<https://www.facebook.com/kouhei.ootomo>



うための部署で、それが地域連携室、医療連携室、といった名称の部署だった。そのようなわけで病院の中では比較的新しい部署だが、その連携室がまず手掛けたのは地域で患者のかかりつけ医となつている診療所との連携だった。「病診連携」と言われる。病診連携がある程度出来上がっていると、次の課題は機能の異なる病院同士の連携だった。急性期を脱した患者が円滑に次の医療を担う病院に移れるための「病病連携」である。医療の連携が密になつても、それだけでは患者の問題は解決しない。高齢に伴い、介護が必要な患者も増加し、介護事業者との連携も必要になった。そこで「医療介護連携」のための取り組みが進んだ。

「せんカフェ」の「言ひ出し」

さて、「せんカフェ」の「言ひ出し」は、実は私ではない。地域包括支援センターに勤める介護支援専門員で、一緒に「せんカフェ」の共同代表を務める荒井裕江女史こそが言ひ出しっぺである。彼女とは最初、仙台市内で介護職が集まつた飲み会で普通に名刺交換をしたのだが、その後小学校の時に同じクラスだったことに気づいた。また、彼女とは目指す方向性に似通つたところがあつた。要はつながることの重要性、つながれる場をつくることの重要性への認識が共通していたのである。それでそれ以降、医療や介護の関係者が集まれるイベントごとと一緒に企画する機会が多かつた。

そこで必要になつたのが、病院内で対外的な調整を行うための部署で、それが地域連携室、医療連携室、といった名称の部署だった。そのようなわけで病院の中では比較的新しい部署だが、その連携室がまず手掛けたのは地域で患者のかかりつけ医となつている診療所との連携だった。「病診連携」と言われる。病診連携がある程度出来上がっていると、次の課題は機能の異なる病院同士の連携だった。急性期を脱した患者が円滑に次の医療を担う病院に移れるための「病病連携」である。医療の連携が密になつても、それだけでは患者の問題は解決しない。高齢に伴い、介護が必要な患者も増加し、介護事業者との連携も必要になった。そこで「医療介護連携」のための取り組みが進んだ。

どうのようにして連携を密にしていけるか、まず顔を合わせる機会をつくるのが有効である。そのようなわけで、全国各地に医療職同士や医療職と介護職が交流できる場ができた。それによつて医療や介護の連携は大いに進んだし、それによつて医療や介護が必要な人があつたに違いない。

り立たせるためには関係者間でお互いの顔が見えるつながりをつくるのが重要だと、様々な事例を見聞きする中で強く感じていた。彼女は彼女で、普段の仕事を通して、やはり関係職種がつながることの重要性を実感していたのだろう。

違うのは、そこからの行動力である。「せんカフェ」にはお手本がある。東京の世田谷でやつている「せたカフェ」である。その情報を、やはり「せたカフェ」をお手本に宮崎の日南市で「にちなんもちよりカフェ」を運営していた宮崎県立日南病院の医師、木佐貫篤氏から聞かされた。彼女が「せたカフェ」を主宰しているノンフィクションライターの中澤まゆみ氏にコンタクトを取り、実際に「せたカフェ」に参加した。それが、一年の九月下旬。実際に見てみたい！と思つたようので、十一月初めには「もちよりカフェ」、仙台でも開催しないか？」と連絡が来た。彼女は、医療介護の壁を超えて、一般の人にも気兼ねなく集える会をつくりたい、そこでいろいろな人をつなぎたい、と考えたのである。

私は私で、仕事柄、地域の中で専門職同士のつながる場ができて、実際にそこで得たつながりが医療介護の現場でも活かされていることも見てきた。仙台市内はもとより、東北の各地域でも活発に活動している

連携の会も多くある。ただ、先述のように、医療や介護を取り巻く連携が新たな段階を迎えつつある中で地域全体のことを考えた時に、専門職同士がつながるだけでは不十分だとも感じていた。専門職同士の熱意ある取り組みが地域に見えるためには、地域に開かれた場も必要なのではないか、そう考えていたところに、彼女からそのような相談があつたので、もろ手を挙げて賛成して一緒にやることになったのである。

木佐貫氏や中澤氏のこと私は私もよく存じ上げているし、中澤氏からはぜひ一度「せたカフェ」に、とお誘いもいただいていたが、日々のバタバタに追われて行けないでいたところに、彼女があつたという間に行動に移した方がという意見もあつたのだが、私としては毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。

また、デザインに強い知り合いにリーフレット作成を依頼し、必要部数を印刷して、仙台市内の公共施設に足を運んで置いてもらえよう依頼したり、趣旨に賛同して協力してくれそうな人たちに声を掛けて運営に協力してもらええる仲間を募つたりするなど、とにかく周りを巻き込んで精力的に動き回つた。その結果「せたカフェ」の視察からわずか半年後に「せんカフェ」をスタートすることができた。

私がこだわつたことと言えば、毎月決まった日に開催するようにしたいということであつた。皆、仕事をしながら手弁当での運営となるので、準備の大変さなどを考慮して隔月の開催にした方がという意見もあつたのだが、私としては毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。

会ではまず、会の趣旨を説明し、参加者に守つていただきたい、「三つの約束」を読み上げた後、あらかじめお願いしておいた参加者お一人に「話題提供」をしていただく。参加者一人ひとり、話してみることであつた。皆、仕事をしながら手弁当での運営となるので、準備の大変さなどを考慮して隔月の開催にした方がという意見もあつたのだが、私としては毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。

「毎月第三火曜日は「せんカフェ」の日」ということが定着するよう、今後も地道に、着実に「せんカフェ」を続けていきたいと考えている。もし関心のある人がいれば、ぜひ毎月第三火曜日夜七時にエル・パーク仙台五階の「創作アトリエ&食のアトリエ」に来ていただければと思う。そこにはいつも笑顔での対話がたくさんあるはずである。

か半年足らずの昨年四月一日(火)に、第一回の「せんカフェ」開催にこぎつけた。会場の定員ぎりぎりの五十名の方に参加していただいたが、医療や介護の専門職はもちろん、障害を持つ人や家族に障害を持つ人がいる人も含めて様々な人が集まっていた。ただ、「せんカフェ」の最重要のキーワードは「ごちゃ混ぜ」だと常々荒井氏とは話し合っている。その意味でもとてもよかった。

会ではまず、会の趣旨を説明し、参加者に守つていただきたい、「三つの約束」を読み上げた後、あらかじめお願いしておいた参加者お一人に「話題提供」をしていただく。参加者一人ひとり、話してみることであつた。皆、仕事をしながら手弁当での運営となるので、準備の大変さなどを考慮して隔月の開催にした方がという意見もあつたのだが、私としては毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。

「毎月第三火曜日は「せんカフェ」の日」ということが定着するよう、今後も地道に、着実に「せんカフェ」を続けていきたいと考えている。もし関心のある人がいれば、ぜひ毎月第三火曜日夜七時にエル・パーク仙台五階の「創作アトリエ&食のアトリエ」に来ていただければと思う。そこにはいつも笑顔での対話がたくさんあるはずである。

柄、地域の医療や介護を成

りたせるためには関係者間でお互いの顔が見えるつながりをつくるのが重要だと、様々な事例を見聞きする中で強く感じていた。彼女は彼女で、普段の仕事を通して、やはり関係職種がつながることの重要性を実感していたのだろう。

違うのは、そこからの行動力である。「せんカフェ」にはお手本がある。東京の世田谷でやつている「せたカフェ」である。その情報を、やはり「せたカフェ」をお手本に宮崎の日南市で「にちなんもちよりカフェ」を運営していた宮崎県立日南病院の医師、木佐貫篤氏から聞かされた。彼女が「せたカフェ」を主宰しているノンフィクションライターの中澤まゆみ氏にコンタクトを取り、実際に「せたカフェ」に参加した。それが、一年の九月下旬。実際に見てみたい！と思つたようので、十一月初めには「もちよりカフェ」、仙台でも開催しないか？」と連絡が来た。彼女は、医療介護の壁を超えて、一般の人にも気兼ねなく集える会をつくりたい、そこでいろいろな人をつなぎたい、と考えたのである。

私は私で、仕事柄、地域の中で専門職同士のつながる場ができて、実際にそこで得たつながりが医療介護の現場でも活かされていることも見てきた。仙台市内はもとより、東北の各地域でも活発に活動している

連携の会も多くある。ただ、先述のように、医療や介護を取り巻く連携が新たな段階を迎えつつある中で地域全体のことを考えた時に、専門職同士がつながるだけでは不十分だとも感じていた。専門職同士の熱意ある取り組みが地域に見えるためには、地域に開かれた場も必要なのではないか、そう考えていたところに、彼女からそのような相談があつたので、もろ手を挙げて賛成して一緒にやることになったのである。

私がこだわつたことと言えば、毎月決まった日に開催するようにしたいということであつた。皆、仕事をしながら手弁当での運営となるので、準備の大変さなどを考慮して隔月の開催にした方がという意見もあつたのだが、私としては毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。毎月決まった日にそこに来れば必ずみんながいる、という場を作りたい。

「毎月第三火曜日は「せんカフェ」の日」ということが定着するよう、今後も地道に、着実に「せんカフェ」を続けていきたいと考えている。もし関心のある人がいれば、ぜひ毎月第三火曜日夜七時にエル・パーク仙台五階の「創作アトリエ&食のアトリエ」に来ていただければと思う。そこにはいつも笑顔での対話がたくさんあるはずである。

「王なき国」へのつらさ 東北の事

新たな年が明けたが、巷では平成最後と同時に新元号最初の年である事に加え、翌年には東京オリンピックという一大国家事業を控えるというだけあって、一種特別な区切りの年越しと感じている人も多いのではないだろうか。

思えば前元号・昭和の時代は私が十八歳の冬を過ごしていたある日、天皇の崩御により突然に終わった。

今回は一年以上前に生前退位が決まっており、平成天皇は「上皇」へと転身するとい、現在生きている世代は誰も見た事のない、約二百年ぶりの「天皇譲位」を目の当たりにする訳



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め、東北好きである。

である。

それにしても、天皇という存在は立場によって対する感情や捉え方が変わってくるものだ。英国をはじめ王を戴く国々にとっては共通点が見出されて親近感が湧くだろうし、米国など王を持たない国にとってはどこか踏み込み難い領域のある神秘的な存在と映るかも知れない。一方で韓国や中国など古代から日本と天皇の存在を知り、交渉と軋轢を繰り返してきた隣国にとつては複雑な愛憎の感情とともに、得体の知れなさへの不安を抱かせる存在なのかも知れない。

それは古くから同じ日本列島に住む私たちであつても同様だ。アイヌ民族や沖縄の人々はもちろん、古来より直接の臣民であるはずの「大和民族」の間ですら、その気持ちは一様・一枚岩とは到底言えないだろう。つくづく論じ難いテーマではあるが、当新聞紙面だからこそ書ける事もあるだろうと判断して、この特別な年明けの機会に東北にとつての天皇について考えてみたい。

一般に、東北といえば「蝦夷」であり、少し歴史をかじった人間ならば古代から「天皇を戴く国家」に従

わず叛乱を繰り返した『まづるわぬ民』というイメージを持つことだろう。その系譜は、戊辰戦争にて、「賊軍」の烙印を不当に押されながらもどこか「上等だ！甘んじてその汚名受けようぞ」というような、もはや体質的に「まづるわぬ」様が板についてしまつていく、因果な地域性とも言える。

ところが、近年この概念を全く覆してしまふ論説に出会った。以前、拙稿で紹介した独学の古代史研究家・関裕二氏の著作『新・古代史謎解き紀行 消えた蝦夷たちの謎 東北編』によれば、蝦夷は始めの時代、「天皇に信頼されていた」上に、天皇にとつての「数少ない味方だった」というのである。一体、どういふ事なのだろうか？

そもそも、天皇とは一体何者だったのか。かつて私は天皇の始祖が大陸より渡来して、先住の出雲系勢力を屈服させたのだと単純に考えていたので、天皇と先住の勢力、つまり蝦夷を含む土着の人々とは始めから対立していたのだと思ひ込んでいた。

ところが、関氏の説では思いもかけぬ展開を見せる。天皇の祖はもと出雲系つまり先住民側の出身であり、出雲を下し制圧した側である「大和政権」に迎え入れられて天皇になった、という事らしいのだ。なぜこのような事になっ

たかという、まず関説によれば九州にあつたという邪馬台国が瀬戸内海の吉備・日本海の出雲・そして畿内のヤマトの連合軍と戦い、出雲のトヨ(神功皇后)によって滅ぼされる。しかし邪馬台国を乗っ取り力をつける出雲を怖れた吉備が、今度はトヨを抹殺しに掛かった、というのだ。トヨは九州南部に落ち延びるが、ヤマトに君臨した吉備はやがて崇りを怖れてトヨの子孫を司祭王、即ち後の天皇として迎え入れた、という顛末である。

この崇りというのは具体的に、ヤマトに蔓延した疫病であつたろうとし、これが出雲神である奈良・三輪山の大神主神による「トヨの末裔を迎えよ」という託宣とされたのだとする。これにより出雲の末裔はヤマトの実権なき王となつた

が、本来は敵であつた領域に単独で赴く破目になった彼は古くから信用のおける存在を身辺の警護役として側に置いた。それが出雲と同様先住民側の、九州の隼人であり、東国・奥羽の蝦夷であつた、という事なのだ。荒唐無稽な創作のようだが、初期の天皇が蝦夷達を警護に置いたのは事実であり、このような背景なしでは辻褃が合わない、とすれば、出雲を下し制圧した

関氏によれば、朝廷の蝦夷への対応がガラリと変わったのが世に言う「大化の改新」直後からだという。

それ以前の天皇とは、司祭王からの脱却を図つたかのような雄略、継体ら実力行使型の王に始まり推古や聖徳太子に連なる流れである。彼らを背後から支えたのが蘇我氏であり、そして東国・東北の蝦夷だった。

しかし後の天智天皇と中臣鎌足のクーデターによって政局はひっくり返り、新政権、特に鎌足の子孫・藤原一族にとつて蝦夷は敵であり、討伐の対象に変わってしまった。それが関氏の思い描く、歴史の真相である。それ以後、桓武天皇を代表として蝦夷を侵略し、強制移住させ、処刑するヤマトの王は完全に東北の敵となつたはずであつた。

では一体いつから東北人は天皇を再び自らの王として受け入れるようになったのだろうか。思い起こされるのは、南北朝時代の、北畠顕家に従つて畿内まで進軍した奥州勢(一度目・五万人、二度目・十万人)である。南朝勢力維持のために奥羽へ派遣された中央貴族・顯家の打倒足利のための出撃で、何故東北人は困難極める強行軍に二度も参戦したのか。鍵はその時代、南朝・北朝という二人の天皇が存在した事にあるかも知れない。

東北の人々の運命の分かれ目は、天皇を称する者が二人存在する瞬間。東北人の心の深層に、政権の入れ替わつた古代の記憶が残つていたのである。

ところが、それで終わりではなかつた。南北朝時代の五百年後の徳川時代の末期、またも天皇が二人並立する時がやつてきたのだ。戊辰の東北戦争である。

奥羽越現藩同盟は「東武皇帝」としても一人の天皇を擁立し、薩長軍の掲げる、こちらも急拵えの「錦の御旗」に対抗したのである(ただし、これについては異論あり定説にはなっていない)。

これら歴史の節目節目に見られる東北の動向は何を意味するのだろうか。東北人にとつて天皇とは単純に敵方の大将というのではなく、むしろ内奥に「天皇は我らのもの」という意識を絶やせずにいた。だからこそ、天皇が二人になつたり、中央政府ではなく天皇自身が困窮した時に放つておけなかつたりする歴史が続いてきたのではなかつたか。

そもそも東北人にとつて「王」とは何であるか。例え、大化の改新以前の天皇が蝦夷と信頼関係にあり東北の人々に敬われ慕われていたとしても、天皇が東北に居住した過去はほとんどない。スコットランド国王ジェームス六世がイングランドに迎えられ、英国王ジェームス一世になった事がスコットランド人を失望させたように、東北に居住してなければ東北の王とは言えないのである。その意味でかつて東北の

王と称された人物といえ、「悪路王」または彼としばしば同一視されるアテルイ、平泉を中心に東北全域を支配したと言われる奥州藤原氏、そして支配は一時的に南東北のかなり広い範囲に達し、その策略と武力、そして飽くなき野心によって自他共に「奥州王」の異名を揮つた伊達政宗であろうか。おそらく、アテルイに関しては「東北全域のリーダー」とは言えない、奥州藤原氏においては「独立国家を敷いた訳ではなく、あくまで朝廷の臣下だった」、伊達政宗に至つては「ひたすら天下人にへつらつて保身に徹した姿は到底王者の名にふさわしくない」と、いくらでも否定する事はできるだろう。しかし藤原氏や伊達氏の去就は、表立った抵抗を続ければ結局は滅ぼされる事を、アテルイや奥州安倍氏の結末に学んでの事ではなかつたろうか。

彼らの、自らの地元に理想郷を作ろうという心意気、外敵からの侵攻を徹底的に防ごうという覇気こそは、彼らがここ奥羽東北の王者であつた証ではないだろうか。その意味では、沖繩で戦い続けた故・翁長雄志氏やその遺志を継ぐ玉城デニー氏も、まさに現代の琉球王と言えるかも知れない。

さてしかし、現代の東北には六県範囲全域の視野を示すリーダーは見当たらず、王とまで呼べる人物は非常に長い年月に渡つて存在し



天皇の意外な正体に迫る！
関裕二『消えた蝦夷たちの謎』

まず第一に、それを東北自身の力で実現しようとした平泉藤原氏という王を失つてからは、東北は「王なき国」になつたのだ、と二十代後半の頃に学んだからである。それは今回、実は当初は天皇と蝦夷が信頼関係にあり、蝦夷は天皇を自らの王と認めていた、という仮説を正しいとしても変わる事はない。いかに天皇が東北を巡幸しその民草を愛しても、東北の人々が彼を敬い慕つても、天皇が東北の王になる事は、そして現在彼が「日本の象徴」であるとしても「東北の象徴」になる事は決してないのだ。

だからこれからの東北人は、天皇に敬意を表しながらも、東北という国の象徴は自ら決め、そして王がなくなるとも復興してみせるのだと高らかに宣言しよう。それが骨の髄まで『まづるわぬ民』と成り果てた、蝦夷の末裔の心意気である。

私個人としては、長年に渡り天皇を「隣りの王様」と考えてきた。東北人としての立場から、東北の繁栄を



石塔 (蠶霊塔)



冬の稲荷社



明けましておめでとうございます



赤い鳥居

シリーズ 遠野の自然 「遠野の小寒」 遠野 1000 景より

今回は、遠野の年末年始の風景からお届けします。昨年、世界中で既存の枠組みが壊れて、何もかもが流動化して、あちこちで争いも多発して、とても落ち着かない気分が長く続いておりました。そうした昨年を振り返り、今年を展望するとき、遠野の落ち着いた風景を見ると、穏やかな気分になります。生きていくには、いつも自分がどこにいるのかを確認できる状況が必要です。それが確認できないと前進力も気力も湧いてこないのです。筆者の場合には、遠野の風景群がそのひとつとなっています。今年もよろしくお願いたします。



初冬の堤にて



冬のタンポポ



朝日を浴びる二郷山



4日月

「縄文」を単なるブームで終わらせて良いのか？

縄文と名の付くセミナーはキャンセル待ちの大人気

昨年のクリスマススイブ開催予定で、知人が講師を務める『先住民族と縄文人』というセミナーに十一月に事前に申し込みもしたらなんとすでに満席ということだった。

開催まで一か月以上あるというのに満席とは、正直なところ、非常に驚いてしまった。

こんなセミナーなどめったにお目にかからない。

あとでよくよく考えてみたら、今は「縄文」と名がつくだけで大人気になるということであり、そのため

の満席だったのかと何とか納得した。

キャンセル待ちにして待っていたら、定員を五割以上増やしての開催で受講資格が取れた。

当日、会場に行くと、たくさんの受講者がいた。知り合い同士が多いらしく、筆者は妙な孤立感を抱いた。

さまざまな縄文イベントで顔見知りの参加者が多かったようだ。交わされる言葉も、別世界の如くに感じてしまった。

そんなことで、おそらくいほどの『縄文ブーム』がいま日本中に湧きおこっているのを感じた。

そういえばと思いつくことがあった。

上野の博物館で、縄文に関する映画を上映したときもそうだった。

受付するまで長蛇の列で、一時間以上待った。

映画開催側のあいさつでも、こんなに観客が集まる

とは思っていなかった、会場のせいぜい三分の一も埋まればいいと思っていたが、急遽、後ろの席も用意



縄文土偶



『先住民族と縄文人』というセミナー看板

縄文研究者が違和感を覚えるほどのブーム

まだある。縄文の土器・土偶展のときもそうだった。なんでこんなに長蛇の列になるのかとても不思議だった。

会場内では、あまりの人だかりで、めったに一堂に会することのない国宝の土器・土偶を満足に見ることができなかった。

これがブームということなのだろう。

ほんの少し前までは、こうした状況は予想さえできなかった。

縄文が趣味というだけで変わり者扱いされていたのはほんの少し前のことだ。

しかし、かくいう筆者も、この縄文ブームを支える一人とみなされているのかもしれない。

なにも筆者だけが驚いているのではない。

一番驚いているのは、縄文研究者たちであろう。

現に、縄文研究者であり、いまも発掘調査をしている

ふたりの講師



大勢のセミナー受講者



前記のセミナー講師も言っていた。

いまの「縄文ブーム」に違和感があると：

それに続けて、遠慮がちに、縄文とはこうだ、ああ

だと決めつけるのは好ましくないとも言っていた。

確かに、にわか作りの「縄文ブーマー」が、ほんのわずかな知識を拡大応用して

縄文時代の文化や遺物等のすべてを理解したかのよう

に言うときの決まり文句を連想してしまう。

ブームには、にわか専門家が多数出現するのが常である。

縄文から何を学べばよいのか

こうした中であって、縄文から何を学べばよいのだろうか。

講師が言っていたように、縄文について、あまり決めつけをせずに、かつて縄文人がどう生きたか、厳しい環境のなかでどう生き抜い

ていったかを学ぶことである。

そうすることで、縄文人の未裔である現代日本人が、この混迷した時代を生き抜くためのヒントを得られればよいのだと思う。

変えてよいものと変えられないもの、未来を想定した生き方

また、筆者なりの解釈ではあるが、縄文人と言われる人々は、伝統という伝統の何もかもを後生大事に守って生きたのではなく、環境や状況に合わせて、変えて良いものはどんどん変えていく。

逆に、変えてはならないものは長期間に亘って変えない。

そのひとつの例として、

縄文集落があるというのだ。

後世の現代人は、この集落が一期間に、一挙に出来たと思っ込んでいるが、実は何世代にも亘って形成されてきたものであることを忘れてる。

つまりは、縄文人は、一世代に、集落に一つか二つの家しか作らないが、あらかじめ、未来の集落構成員が建てる家の場所を予測したかのように、家を建てる場所を迷いなく建てているというのだ。

現代人の短すぎる時間軸を大いに反省しなければならぬと思っただ次第である。